

国際潮流から見た 日本のODA戦略と実施体制の課題

—CSOからの視点—

国際協力NGOセンター
遠藤衛



1. 援助効果潮流の背景

- 世界的な行政改革の流れ：減少する税収で増大する義務的経費 = 効果重視：政治視点
- アフリカにおける経済成果
- 援助の役割についての見直し
- 与えられる援助から、被援助者が主体に
- 「あれもこれも」から「これだけは」へ
- 工業化は援助の役割？



2. パリ宣言、AAA

- 援助効果概念の具体化
- オーナーシップ、アライメント、調和化、開発成果マネジメント、相互説明責任
- はじめての指標化 = 不完全 > 改善？
- 生かすも殺すも、プレーヤー次第
- 日本政府は？

3.

日本のODA戦略と実施体制の課題

- 過去の援助実績の評価：日本の得意技？
- ODA政策に複数目的：評価を困難に
- 政策形成の参加者：企業？国民は？
- マイクロマネージ強化？パリ宣言・AAA・DAC勧告をどう実現するのか？調和化？
- プロジェクトvs.財政支援？元々、財政支援が少な過ぎる。警察・軍人給与支援？



4. 2011年ソウルに向けて

- 日本のODAが、BRICs及び韓国に対するお手本となる意識が持てるかどうか
- 援助は公益(国際益)か? 国(組織)益か?
- 国益追求のツールはODAとは別に。
- 国民への普及と、専門的議論の深化
- ODA成果を見る視点が外交支持でなく、貧困問題への効果的取組に。政治の役割。